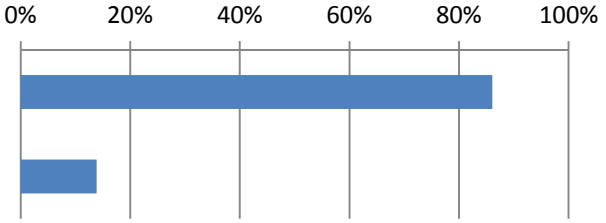
英語分野における授業での情報活用能力育成の取り組みについて

1. 回答率　12%

依頼教員数	304	(名)
回答教員数	36	

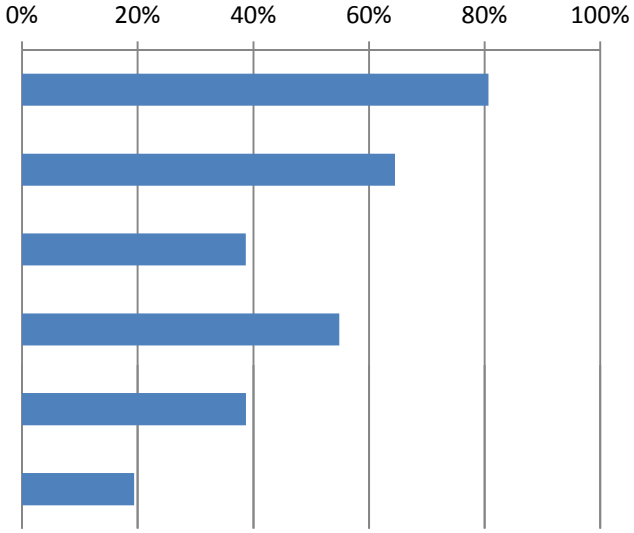
2. 情報教育育成への取組みの割合

項　目	人数	割合
実施している教員	31	86%
実施していない教員	5	14%



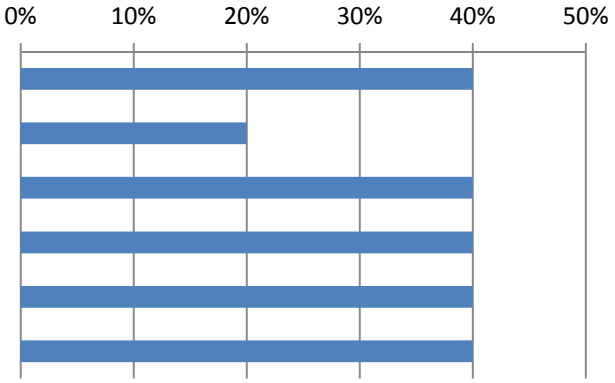
3. 情報活用能力育成への取り組み状況

項　目	人数	割合
英語表現の検索、文献・資料の収集・理解にＩＣＴを利用できる	25	81%
英文の作成、編集、翻訳などにＩＣＴを利用できる	20	65%
音声・画像データなどを通じて効果的に交信するために、ＩＣＴを利用できる	12	39%
剽窃、盗用、発信・表現による文化摩擦などに配慮してＩＣＴを利用できる	17	55%
英語による効果的な交信を行うためにＩＣＴを利用できる	12	39%
複数の相手と協働して協議・交渉・意見交換するためにＩＣＴを利用できる	6	19%



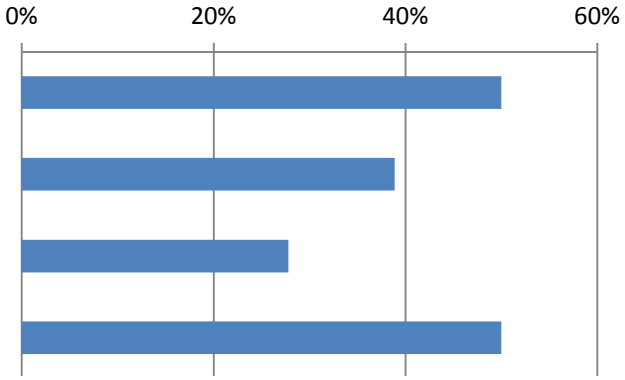
4. 情報活用能力育成を実施していない理由

項　目	人数	割合
初年次･キャリア教育で実施	2	40%
授業を進める上で情報活用能力を意識する必要がない	1	20%
授業で教える時間がない	2	40%
学習の支援体制が不足	2	40%
情報活用能力を指導する力が不足	2	40%
その他	2	40%

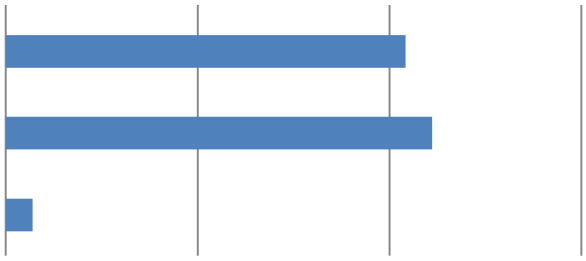


5. 今後取り組まなければならないと考えている教育内容

項　目	人数	割合
英語表現の検索、文献・資料の収集・理解にＩＣＴを利用できる	18	50%
英文の作成、編集、翻訳などにＩＣＴを利用できる	14	39%
音声・画像データなどを通じて効果的に交信するために、ＩＣＴを利用できる	10	28%
剽窃、盗用、発信・表現による文化摩擦などに配慮してＩＣＴを利用できる	18	50%



英語による効果的な交信を行うためにＩＣＴを利用できる	15	42%
複数の相手と協働して協議・交渉・意見交換するためにＩＣＴを利用できる	16	44%
その他	1	3%



６．教育内容の例（教員個人の対応状況）

レポート作成にWeb上の情報を利用する場合の方法について説明している。
・ 英語の用例としての引用：Web上から英語の例文を検索し、それをレポート作成に活用する場合の注意・留意点の説明。
・ 情報としての引用は、Web上から英語の文法・語法などの説明を自分のレポートへの引用方法についての説明・指示。
ただし、上記の二つは、web上以外からの情報利用，例えば本・新聞などの紙媒体やテレビ・映画などの映像・音声媒体の情報収集の場合も含めての包括的説明の一部である。
レポートの書き方に関しては授業中に参考例を見せるか、又は当方のHPで指示を出しておく、前期に一度レポート提出させたものを担当教員がチェック（このレポートではレポートとしての形式面の不備があった場合、これを後期レポートでは訂正させることが目的なので、提出点のみで評価する）。ここで不完全・不十分な箇所があれば、指摘し、これを訂正するべき方向性・やり方をコメントし、返却する。その結果、後期レポートではICTを含めた情報の活用方法に関して相当部分が適正に処理されている。

・ 英語音声学で、大学サーバの発音トレーニングソフトによる自宅学習やインターネットの"Jazz Chant"サイトなどによる発音練習など。
・ Readingなどで、インターネットからの関連資料の検索・収集。
・ 発表におけるPowerPointなどの使用と発表技法の育成。
引用の際、出典の明記や内容の確認、そのとりまとめ方、著作権に対する留意などを併せて指導している。

1学期は、パラグラフライティングから始め、outside sources は使っていない。しかし、パラグラフにおけるtopic sentence は主観的な記述(情報)、それに続くsupports は、それを支持するための客観的情報であるので、その関係（主観ー客観、あるいはgeneral--specific infromation）を意識させている。2学期は、argumentative essay で、自分の意見（主観）をサポートするための客観的な情報として、インターネットや本などからの引用がAPA形式でできるよう、指導している。トピックは、Smoking in public places とかNuclear power generation など難しい内容なので、1年生にとっては文法、語彙面でも大変であるが、少しずつ自分の意見のために、outside sources を使うやり方を学んでいる。

論文の作成、マルチメディア教材作成、クラス内ディスカッション、添削などの活動をICTを利用して行っています。Multi-Media作成は、Webに作品を載せています。

教育実習に行く前の模擬授業実践の過程で、模擬授業風景をビデオ撮影し、動画をネット上にアップし、自己評価や他者評価に使用している。

Website からの情報引用の適切さ(質と量)と引用sourceの明記を徹底して指導しています。テーマごとに英文500語以上のエッセイを前・後期合計3本提出させますが、各エッセイにつき、必ず最低3回ドラフトを提出させ、情報引用の適切さ、引用文献一覧の記述指導を徹底しています。提出・添削指導はすべてonlineです。主教材(音声・画像データも含め)はコース共通の学部授業支援サイトに挙げてあり、学生は毎授業PC持参を義務づけていますので、適宜アクセスさせています。引用のマナーの修得、および適切なサイトの利用には効果をあげています。

今年度はアジア諸国の文化に焦点を当て、学生たちにアジアの国ぐにについて調べ、意見交換を行わせた。wikipediaをはじめ、いろいろなサイトにアクセスさせ、異文化理解を深めた。西欧の国ぐにに対する知識は比較的有していても、アジア諸国に関する関心が薄いことに学生たちが気づいた。その「気づき」から文化理解へと、英語文献を読みながら進めていった。

英語多読多聴において、最新のニュースを探索させる（日本・世界）。世界の美術館ン・博物館を訪ねる。物語（グーテンベルグ）を読む。演習として、無料公開されている検定試験問題などを紹介し、やってみる。

インターネットを活用する英語授業において、上記の項目はすべてカバー（あるいは目標と）すべき内容で、レベルの差はあれ、学生の習熟度に応じてこれらを常に意識しながら授業を展開している。ただ、情報活用能力と学生の英語力両方が揃わないと、こちらが目標としているインターネットを利用した語学教育はあるレベルで止まってしまい、望むべき方向へ授業を展開できない。試行錯誤的な状態が続いているのが現状ではあるが、Googleでの検索方法等の指導は、ウェブ上でうまく情報を取捨選択していく良い訓練になっているように感じている。

Presentation Worshop – Oral Communication for Academic Purposes –をテキストとして、英語プレゼンテーションの仕方を基礎から訓練している。DVDが附属されているので、視覚的にもプレゼンテーションの方法を学ぶことができる。また、PowerPointを用いたスライド作成技術も同時に養成している。与えられた（あるいは個人が選択した）トピックについて、インターネットを用いて様々な情報を入手し、活用させている。その際、レファレンスの方法に留意し、くれぐれも剽窃・盗用とならないよう指導している。

授業外で2コマを用意し，手作りの教材（紙媒体とファイル）を用い，STに4年生を入れます。効果としては，「文献・資料の収集・理解」と「英文の作成・編集・翻訳」において全学生が共通の理解と技術を持つことができ，主としてゼミ活動と卒業論文において相互協力による成果を上げられるようになった。
1.「文芸翻訳」の授業。授業はPC教室を利用し、英文から日本文に、日本文から英文に翻訳の際には、各種オンライン辞書とインターネットを活用し、レポート作成にはワードを、提出には学内のポートフォリオシステムを利用している。オンライン翻訳機に関してはまだ考慮中。 2.「ドラマ・スタディーズ」の授業。シェイクスピアの作品について、インターネット検索、画像、映像の活用を奨励しながら、パワーポイントを使った研究発表させている。単純なコピーアンドペーストを禁止している。 3.「英語b」（基礎英語）。e-Learning のNetAcademyを利用している。家庭での復習や自学自習を奨励している。
必要な情報をすばやく検索し、まとめ発表する。効果があったかどうか検証はしていませんが、英語を速く読む練習にはなっていると思います。少々古いですがHTMLのタグの書き方を英文で読ませて、実際にページを作成させているので、実際何の役にも立たない教科書のリーディングより達成感があり、また理解度を自分自身で確認できると考えます。
授業でおこなう英語プレゼンテーションの内容についてインターネットを使って情報収集させたり、英文を作成する際にオンライン辞書を使ったりしている。
アメリカのgovernment sites，たとえばFDAやCDCにある病気や治療方法についての記事を薬学英語の教材として用いている。目的を明らかにして許可を求めれば無料で利用できるので、一部は教科書として編集している。これまで薬学英語の教科書は皆無に近い状態であったので、新しい教科書に学生たちは興味を持って取り組んでいる。
最近ではWeb上の機械翻訳を、英語の授業の中でどのように位置づけ、どのように取り扱うべきか、試行錯誤している。
論文の書き方や卒業論文の書き方などについて、コンピュータを使用した検索のしかた、また、文献の引用のしかたなどについてゼミの中で指導しております。成果についてはまだ、公に出来るような成果は得られておりませんが、Cinniなどのデータベースやインターネットを活用した情報検索・分析スキルはこれからの時代を生きる若者にとって重要と考えておりますので、効果的な教授方法を模索しております。
大講義室の授業以外はすべてCALL教室で実施しているため、学生は常にコンピュータを用いて英語の授業を受けます。ライティングの授業では、語句や資料の検索を自由にインターネットでさせており、スピーキングではパワーポイントファイルをもちいてプレゼンをするため、提示する内容を文字や画像として検索し、出典を明らかにして使用させます。また、インターネットをもちいた英作文コンテストに参加させ、作品を投稿させ、受賞する学生もいます。いずれの場合も、各自が端末で作業をするため、学習が個別化され、自分のペースで進めることができ、紙のテキストのみを用いた場合よりも学習動機も高いと感じています。
ゼミの研究発表で、一般に状態動詞は進行形にできないといわれているが、GoogleでI'm knowingを検索させてどれくらいヒットするかを示したりして、インターネット検索の活用法を教えています。卒業研究指導で、文字情報、画像、映像などの引用は、必ず、出典を明記するよう指導している。何が剽窃になるかを具体例を示して教えて、剽窃は著作権法違反の犯罪だと指導している。
1. 英文履歴書の作成－デジカメ証明写真の加工、ワードへの貼り付け編集 2. 通訳文章のネット翻訳による確認－単語、熟語、Japanese English の訳をネット翻訳複数を使用しながら適切な訳を見つける。 3. 英語教材の映像を聞き取り、それに字幕をつける。－就職先が英語関係の場合、見本品の説明に日本語または英語の字幕をつける作業の練習。 4. Power Point を使用して自己アピールのプレゼンテーション能力を養う。 5. Skype のネット英語学校講師を予約して、あらかじめ準備した教材、またはあらかじめ打ち合わせをした内容を使用し、私とのペアレッスンを行う。大変に授業効果を上げていると思います。 6. 通訳者の障害となる Japanese English（カタカナ英語）を上記の英語話者に 文章として発表し(Skype 使用)、どれ位理解出来るかをみる。最も大事な点としては、英語単語であるが、異なる意味に理解されてしまうJapanese English の存在を学生が知ることです。プロ通訳が提供してくれたカタカナ英語(通訳仕事中に障害となった)を約200-300語を紹介し英語話者として Japanese English か英語かを見分ける感覚を養って英語ではないと思われる時は、言い換える練習を通して英語力をつけていく。これは英語学習をしている学生には新鮮にうつり、それを英語話者がどのように理解するかに興味を示している。私自身の勉強にもなっています。
海外ドラマを見ながら、仮想字幕を入れる授業を行っているが、その中で、なじみのない事項、例えば、料理名、お菓子類などの表現が出てきたら、インターネットから画像を探してくるような場合に使用している。全員ではなく、担当者別でテーマが異なる。教育効果は分からないが、具体的に画像で見ることは意義があると思う。最近の例では、Baked Alaskaというお菓子、Sheperd's pieという料理などが具体例である。

7. 大学として必要な課題への意見

・ 授業時に利用できるパソコン完備の教室整備などのハード面の充実。 ・ 情報発信時のモラル教育、著作権に関する教育。（主に教養教育と専門教育の統合教育体制のこと）

・ 教員間の意識や技能の共有と向上。
・ Wikipediaなどからの安易な引用に対する問題意識の啓発。
・ 受験勉強で習慣化したと思われる「正解」を探してそれを答えておしまい(「剽窃」にもつながる)という姿勢ではなく、与えられた情報をいかに批評的に吟味して、自分なりの考察として昇華するか、その心構えと能力の育成。

・ 2012年度より、英米語学科では、1年生から、複数のコースの連携をしながら英語基礎力・批判的思考力を目指した授業を開始する。情報の正しい使い方は、大学教育において重要な点だと思っているが、同じ学科でも温度差があり、全教員が重要性を理 解する必要がある。さらに、専攻語学にかかわらず、もっと全学的に行っていく必要があると感じる。

・ Moodleを教室のパソコンだけでなく、iPhoneやスマートフォンに対応したものにカスタマイズして軽くすること、ユビキタスな環境で学習に取り組めるようにする。

・ 大学内で学生のみならず教職員が情報活用能力を育成するため研修会やサポートシステムの強化。

・ 交信については、携帯で学生はその威力は十分に知っている。むしろその基礎になる語学力が、文字レベルではむしろ落ちているので、その充実が大切と感じている。たとえば、翻訳ソフトによるとんでもない誤訳を理解させるなど。授業中でもよいので、辞書機能などは自由に利用するよう奨励している。これにより自分でする学習習慣が少しでもできればと考えている。ネイティブの先生を中心に辞書を使うことを嫌う先生がよくある。たしかに予習をしてこないのは問題かもしれないが、この傾向が変わらないため、教師は新たな対策を考えるべきである。ストックのない学生に自分の知っている単語を利用するように指導しても、イディオムを知らないので使えないことを、ネイティブの教師は理解すべきである。

・ 学部で運用する授業支援システムと管理運用の専任助手が居るので、この支援体制が維持されることが何よりも重要。

・ 施設の充実
・ カリキュラムの再構築
・ 大学経営陣の理解

・ ハードウェアは揃っていても、英語教育の中でICTを活用するには、教材の作成、選別、運用方法など個々の教員の努力では乗り切るのが負担となる事柄がやはり多い。その意味では、人的な支援体制を含めて大学からの支援が必須である。しかしながら、情報活用能力＝情報技術の進展に歩調を合わせるという図式がICT活用の語学教育では描かれやすく、そのような誤解を早く解くことが重要では。技術革新のおかげで廉価で学生に情報活用能力を身に着けさせることが可能になったことを大学や、そして何よりも英語の教員に広く認知させることが必要かもしれません。

・ 環境の整備は整ってきていますが、なるべく最新の環境を整えて頂きたい(例えば、ブルーレイ・ディスクを利用できるPC教室を増やすなど)
・ 授業に関与できるSEなど学習支援者の常設
・ 映像活用をもっと自由にする(大学内で解決できることではありませんが、著作権法が厳しすぎて教材が制限されてしまいます)

・ 90分の授業時間や学期中15回の授業回数など、表向きの評価にこだわるのは大変困ります。具体的な到達目標に達しているか、どれだけ学生が自分の頭を使ったか、語学の場合は実際に目標言語を使用したかが、授業の良し悪しを決める要因のはずです。お答えになっていないかもしれませんが、要するに「入れ物」にこだわり中身にはいい加減という姿勢が残っているせいで、教室外での学習が進んでいないように思う次第です。

・ 英語による発信能力の向上が課題である。英語で実際に交信のできるサイトがあればよいと思うが、そのようなリサーチを進めてくれる教育支援者としてのスタッフが大学に必要である。

・ 基本的な情報リテラシー教育の保障と充実。

・ 学生の情報活用能力を高めるには、やはり、情報検索・分析の案内役が必要で、そのためのスキルを身につける講義、演習、ワークショップなどがカリキュラムの内外に設置される必要があるように思います。

・ 英語の授業でCALL教室を用いることができる教員、あるいは用いることを希望する教員が少ないため、教員の研修が必要である

・ 新入生に情報リテラシーの授業を通して、学生の情報活用能力の向上に努めている。しかし、学年が進んで、レポートや研究発表、さらには、卒業研究などの調査を行う時に必要な情報活用能力は、各学科によって異なってくると考えられる。その点で、学科単位の指導は、行われていると考えられる。今後は、学科単位にとどまらず、学部単位、大学全体としての統一的な情報活用能力の向上のための仕組みが必要なのかどうかを検討すべきではないかとの問題意識を持っている。

・ 大学は情報活用能力を学生が養う事の出来る施設充実をはかるべき
・ 実用英語を担当していない教員は多くの場合、情報活用にあまり興味がなく故に学生の情報活用能力に目が向いていない。自分自身に情報活用能力がないのでも一因であるが、たとえ文学の授業であっても、情報技術が授業を活性化する事を知ってほしい。文学作品の内容把握、時代背景説明、レポート作成等々に率先して情報を活用して学生の為に潤いある授業を展開すべきである。自己が大学時代に学んだ文学作品の翻訳を30-40年にわたり同じ形式と内容で教鞭をとれるのが信じがたい。数行を訳すのに黒板とマイクでどうやって90分間をもたせるのか観察してみたい。中世英語のコーパスを作成したり、映像やネットからの情報を駆使すべきと考える。文学作品の鑑賞は英語の基礎能力、コミュニケーション能力を習得してから、褒美として学ぶ事と思う。しかし人間の感性を扱った文学作品鑑賞は言語を習得する上で決しておろそかにしてはいけないと思います。文学系の授業は学生にあまり人気はないが、私は決して文学を軽んじてはおらず、陣限の本質を学び、考えを豊かに、知性をつけていく大切な事ゆえにもっと学生の興味をひくようにしなければならないと考えています。

・ すべての授業でコンピュータ教室が使用できるわけではないので、発表担当学生にのみ、インターネット利用の課題を出している。教室に教員用にだけでも1台あり、プロジェクターが揃っていれば、文化に根ざしたものの画像を取り込むことだけでなく、時事英語、英語表現などの検索に利用できると思う。